

「後深草院二条とその生きた時代」

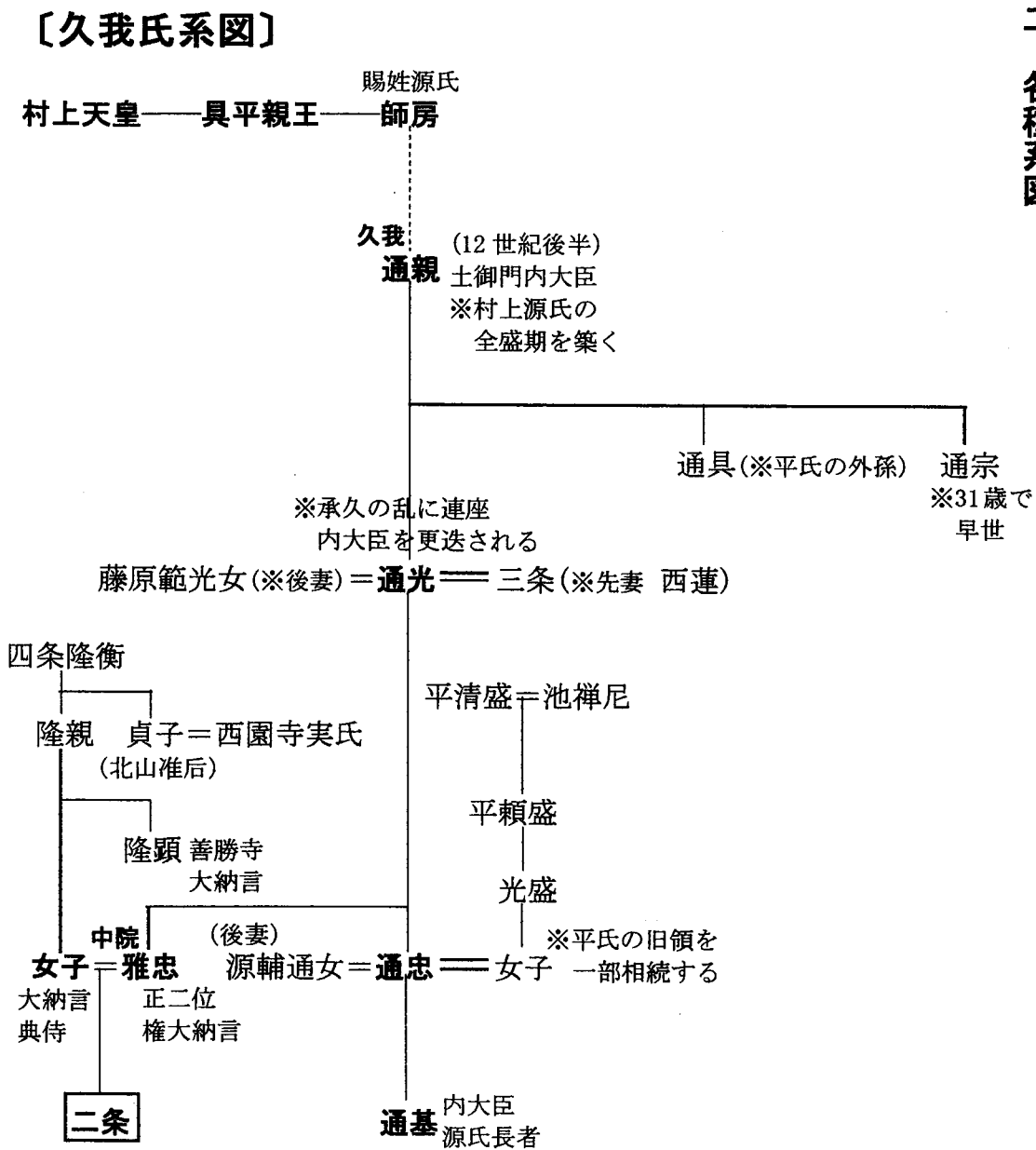
田井 秀

一、はじめに

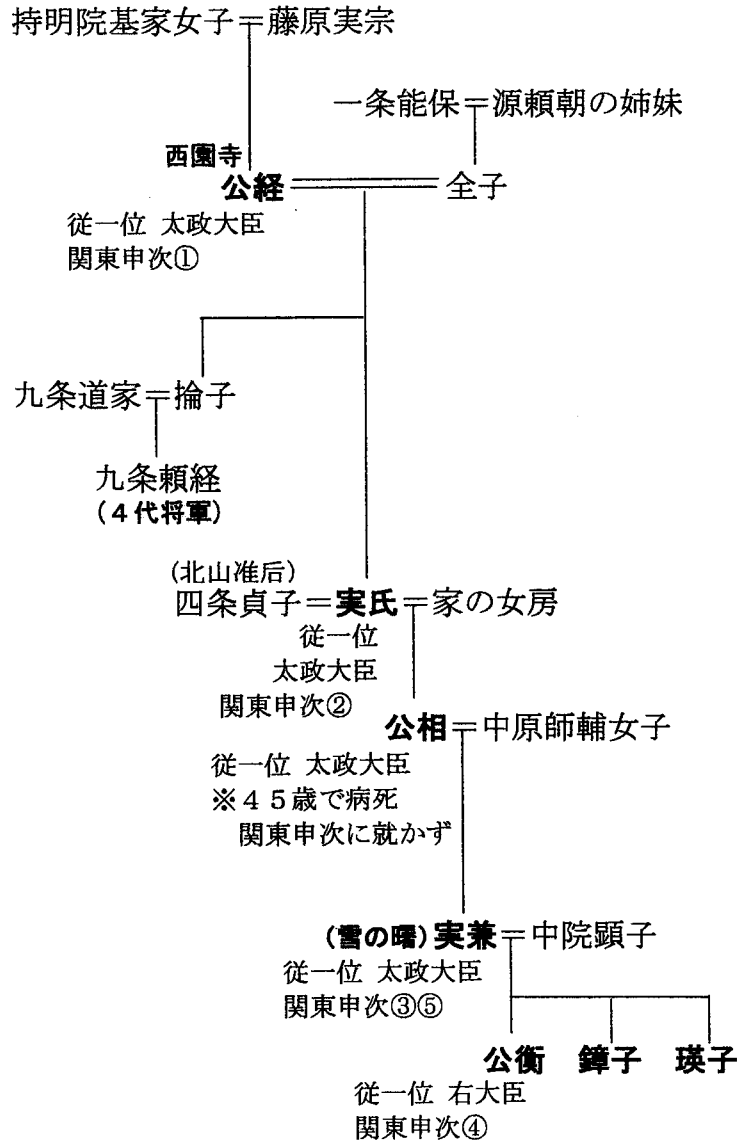
◎ 後深草院二条とは

- 鎌倉時代中期、後深草院に仕えて「二条」という女房名で呼ばれていた女性。
- ・ 当時の朝廷は、承久の乱での敗戦から幕府に対する政治的主導権を失い、院政を敷く上皇の専権であった西国での軍事的指揮権はもとより、皇位選定権をも幕府に握られるようになっていた。その上 摂関の任命権をも幕府が掌握するところとなっていく。
- ・ このように実質的権力を失っていた朝廷であったが、伝統文化の継承面では武士階級に対し未だ圧倒的な地位と権威を保っていた。武家側も亦 逡巡するところがあった。
- ・ そうしたことが影響してか、自壞に対する公家階級の危機感は乏しく、皇位の行方や官位の昇進・争奪が主たる関心事となつて、宮廷内は退廃的な風潮に覆われていた。
- ・ そのような朝廷にあつて宮廷男性たちの愛欲に翻弄され、性の遍歴を重ねる中で傷つきながらも成長していく自らの姿をまとめたのが自伝的物語『とはずがたり』である。

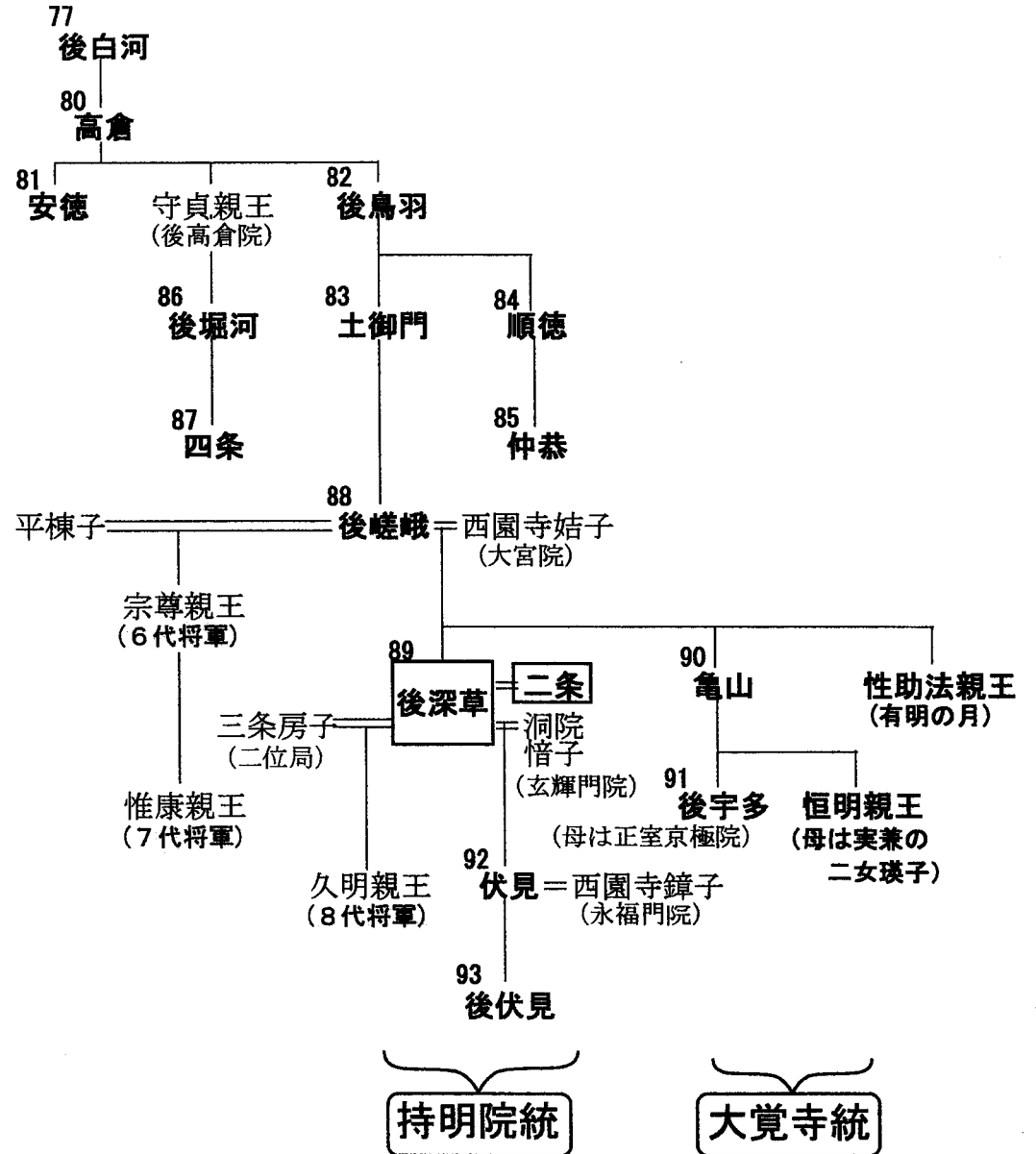
二、各種系図



〔当時の西園寺家系図〕



〔当時の天皇家系図〕



三、略年表

年号	天皇	社会、その他の動き	歳	二条および彼女との関連事項
正嘉二年 (一一五八)	後深草 (後嵯峨院政)	・京都や畿内 大風雨 ・諸国の盗賊 蜂起	1	○二条 誕生
正元一年 (一一五九)		・閑院の内裏 焼失 ・諸国飢饉 疫病流行	2	○二条の母 死去
弘長一年 (一一六一)	龜山践祚 (後嵯峨院政)	・幕府 日蓮を伊豆に 流罪 二年後宥免	4	○二条 後深草天皇の御所に引き取られる
弘長三年 (一一六三)		・北条時頼 死去 ・時宗が家督を継ぐ	6	
文永三年 (一一六六)		・幕府 宗尊親王を廃 し 惟康親王就任	9	
文永四年 (一一六七)		・京都 長雨 洪水	10	※『とはすがたり』の記述無し
文永八年 (一一七一)		・日蓮 佐渡に配流	14	○後深草院の寵愛を受けるも、既に雪の曙と相思の関係にあった
文永九年 (一一七二)	※院政停止	・後嵯峨院 病む 兩 六波羅探題 見舞う ・後嵯峨院 薨す ・大宮院 後深草院の 遺詔を披露	15	※六波羅探題南 北条時輔 見舞いの六日後 北条時宗の命で誅せらる ○後嵯峨院に続いて 父雅忠 死去 ○乳母邸にて雪の曙と契る
文永十年 (一一七三)		・京都 火災 ・万里小路内裏 焼失	16	○後深草院の皇子を出産 ○里居にて雪の曙と密通
文永十一年 (一一七四)	後宇多 践祚 (龜山院政)	・元軍 博多に襲来 (文永の役)	17	○雪の曙の子を出産 曙が引き取る ○後深草院との間の皇子 死去
建治一年 (一一七五)		・幕府 服属を求める 元の使者を斬る	18	○有明の月と通じる ※後深草院の皇子熙仁親王立太子
建治二年 (一一七六)		・幕府 鎮西の将士に 防塁を築かせる	19	○出雲路にて有明と遇う 二条 絶交を決意 有明 呪詛の起請文送付
建治三年 (一一七七)		・十六夜日記の作者 阿仏尼が訴訟のため 鎌倉へ下向	20	○伏見醍醐に身を隠す 曙 来訪 ○曙との間の女兒と対面 ※後深草院の御所六条殿が焼失 ○後深草院 今様伝授で伏見に御幸、 院の計画で鷹司兼平と交わらされる

弘安一年 (二二七八)	後宇多 (龜山院政)	・二条内裏 焼失	21	※『とはすがたり』の記述無し
弘安二年 (二二七九)		・朝議の却下を受けて 幕府 元使を斬る	22	○祖父四条隆親没(二代要記) 『とはすがたり』の中では 弘安八年とされている
弘安三年 (二二八〇)		・朝廷 諸寺に異国降伏 を祈願させる	23	○有明の月の求愛にあがらえず御 所内で契る
弘安四年 (二二八一)		・元軍 対馬壱岐から 博多湾に襲来する (弘安の役)	24	○龜山院との交接
弘安五年 (二二八二)		・時宗 円覚寺を建立し 敵味方の区別なく死 者を供養	25	○有明の男児を出産 暫らく育てる ○後深草院御所に出仕 ○有明の月 流行り病で急死
弘安六年 (二二八三)		・阿仏尼 死去	26	○後深草院と疎遠になる ○東二条院の命で御所退去 ○石清水や祇園社に参籠
弘安七年 (二二八四)		・北条時宗 死去 ・貞時が家督を継ぐ	27	○祇園社に桜を奉納 ○千部経読誦開始
弘安八年 (二二八五)		・得宗の外戚安達氏、得 宗被官らにより討滅 される(霜月騒動)	28	○大宮院の誘いにより北山准後の 九十歳の賀に出仕 ※北山准後は百七歳の長寿を保つ
弘安九年 (二二八六)		・龜山院 豊受宮役夫工 米未済分を督促 ・幕府 弘安の役の恩賞 を行なう	29	※『とはすがたり』の記述無し
弘安十年 (二二八七)	伏見踐祚 (後深草院政)	・幕府 東宮熙仁親王の 踐祚を要求	30	
正応一年 (二二八八)		・二条内裏 焼失	31	
正応二年 (二二八九)		・將軍惟康親王上洛 ・久明親王着到	32	※この年以降「女西行」として各地 を旅し 人々と歌の贈答をする ○東国に旅立つ 熱田社参詣・参籠 ・江島に宿 鎌倉で一か月ほど病臥 ○將軍交替を目の当たりにする ○飯沼資宗邸の歌会に参加 ○川口に移り越年
正応三年 (二二九〇)		・藤原為頼父子 禁中に乱入 ○後深草院 出家	33	○善光寺参詣 帰路 浅草寺に参詣 鎌倉に戻り帰洛 飯沼との歌会 ○帰洛の途中 伊勢二見・奈良に寄る

正応四年 (一一九二)	伏見 (院政なし)	・幕府 諸国の社寺に異国 降伏の祈禱を命じる ・西園寺実兼 任太政大臣 ・元 琉球に来襲	34	○奈良からの帰りに石清水八幡宮に 参籠 そこで後深草院の御幸に出 逢い 院と一夜を語り明かす ○熱田社参籠 その折 熱田社が炎上
正応五年 (一一九三)		・京や大和 社寺の神人や 衆徒らの蜂起が相次ぐ	35	※飯沼資宗上京 行装が賞賛される ※大宮院死去
永仁一年 (一一九三)		・鎌倉では平頼綱・飯沼資 宗父子が誅殺される	36	○伏見殿で後深草院と語る 帰洛後 院から見舞いの贈り物あり
正安一年 (一一九九)	後伏見 (伏見院政)	・永仁五年(一一九七) 幕府 徳政令を發布 ・西園寺実兼 出家 ・元使 一山一寧来朝	42	○伊勢二見を再訪 ※『とはずがたり』の記述中断 ←
乾元一年 (一二〇二)	後二条 (後宇多院政)		45	○厳島・土佐足摺岬・讃岐・備後・備中 と旅をする 各地で歌の贈答
嘉元一年 (一二〇三)		・恒明親王誕生 (母 昭訓門院)	46	○備中吉備津宮に詣でた後 帰洛
嘉元二年 (一二〇四)		・後深草院 病臥 " 死去	47	○石清水八幡に院の恢復を祈る ○院の四十九日の仏事を聴聞 ○母の形見を売って写経の資とする
嘉元三年 (一二〇五)		・亀山院 死去	48	○父の形見を売って写経の資とする ○後深草院の一周忌の仏事を聴聞 ○熊野へ出立 ・那智社に大般若経廿卷を奉納
徳治元年 (一二〇六)		・日本の商船 元と貿易を 行なう	49	○石清水八幡宮に参詣 ○院の三回忌の仏事を聴聞した後 従兄の久我通基と歌を贈答(終)

四、登場人物

(1) 二条の家系

- ・父の源 雅忠は、鎌倉時代前期から中期にかけての公卿。村上源氏中院流久我(こが)家、太政大臣・久我通光の四男(公卿補任) または六男(尊卑分脈)。官位は正二位・大納言。
- ・早世した兄通忠のあとをうけて主席大納言まで昇り、氏長者、淳和・奨学両院別当を兼ねたが、大臣任官を目前にして四五歳で死去する。

※当時十五歳だった二条は最大の庇護者を失い、このことがその後の彼女の人生に大きく影響する。

・宝治元年(一二四七)の『院(後醍醐院)御歌合』の中に雅忠の次の歌が残されている。

左持

右近中将師繼

徒いたずらに初音程ふる

時鳥ほととぎす まつとせしまに 五月きにけり

右

雅忠朝臣

時鳥 忍ひし程の 一声を 今はさ月に なきやふるさん

左右共に心詞させる無_レ得失_一侍れば、為_レ持、

・母は正二位権大納言四条隆親の娘近子で後深草天皇に仕え大納言典侍と呼ばれた。
・後深草の近臣大炊御門冬忠の妻となり、次いで同じく後深草の近臣久我雅忠の妻となつて二条を生んだが、二条二歳の時に死去する。そのため二条には母の記憶はない。

(2) 西園寺実兼(雪の曙)について

1 誕生 建長一年(一二四九)

2 二条との関係

・文永六年(一二六九)

21歳 祖父実氏より家督を継ぎ、関東申次となる

*正二位 権中納言 兼左衛門督

・文永八年(一二七二)

23歳 元日に二条に求愛

*正二位 権中納言 ※三月に任権大納言

・文永九年(一二七二)

24歳 十月 二条の乳母の邸にて二条と結ばれる

・文永十一年(一二七四)

26歳 九月 二条 曙との間の秘密の子(女児)を出産

曙はその女兒を連れ去る

年末 御所内にて二条と密会

*十月 元の軍勢が肥前沿岸に襲来し

博多湾沿岸に上陸 (文永の役)

・建治三年(一二七七)

29歳 四月 二条の隠れ住む尼寺を来訪 二泊する 最後?

*正二位 権大納言 春宮大夫(とうぐうだいご) ※関東申次

・弘安四年(一二八二)

33歳 *六月 元の軍勢が再度博多湾に襲来

志賀島に上陸 (弘安の役)

*正二位 権大納言 春宮大夫(とうぐうだいご) ※関東申次

・嘉元二年(一二三〇四)

56歳 七月 北山の山荘に二条(47歳)が訪ねてきて 後深草

法皇との最後の対面を請う(巻五)

*七月十六日 法皇死去

3 晩年の実兼

・正安一年(一二九九)

51歳 出家 法名悦空

・正安三年(一二三〇二)

53歳 二女瑛子を龜山院の後宮に入れる

※この瑛子が二条との間にできた女兒かもしれない

・元亨二年(一二三二)

74歳 九月十日 死去

4 実兼に対する評価

▼『花園天皇宸記』元亨二年（一二三二）九月十日条

「（前略）入道相国（西園寺実兼）、西の始（午後五時過ぎ）に事切れたぬと云々、尤も以て驚き歎く、此の相国は朝（朝廷）の元老、国の良弼（良き補佐也）、後嵯峨の朝より仕へ、数代の重臣たり、頃年（近年）以来、跡を桑門（僧侶）に遁る（出家すると雖も、猶 関東の執奏は変らず、又 重事に於ては顧問に預る、上皇 誠に外祖の義有り、身の於ては又曾祖の義たり、旁 以て不歎すべからず、何ぞ況や国の柱石也、文才少と雖も、久しく数代の朝に仕へ、天下の義理（道理）を閲すること多し、朝の為身の為、悲歎尤も深きもの也、（後略）」

5 実兼の歌

○『風雅和歌集』（十四世紀半ば 北朝 持明院統）の天皇によって編まれた勅撰和歌集）の八四四番に 実兼の次の歌が収録されている。

冬

持明院殿にて五十番歌合侍りし時、（中略）

朝雪といふ事を

○ 野も山もひとつにしらむ雪の色にうす雲くらき朝あけの空

（通釈）野も山もひとつに白くなった雪の色——そこへきて 薄雲がひどく暗く見える明け方の空だことよ。

(3) 性助法親王（有明の月）について

○ 後嵯峨院第六皇子 母は太政大臣三条公房女子 宝治一年（一二四七）出生

* 宗尊親王や後深草院の弟 龜山院の兄

・ 建長三年（一二五二） 五歳で親王宣下 続いて仁和寺の法助のもとに入室

・ 正嘉一年（一二五八） 出家

・ 弘長一年（一二六一） 嵯峨野の観音院において伝法灌頂を受ける

・ 建治二年（一二七六） 蒙古調伏のため 孔雀法を仁和寺大聖院に修する

・ 弘安五年（一二八二） 流行病によって急逝 享年 36

* 二条は、性助との間に二人の男子を出産する。二人目の子は暫らく二条自身が育てたことで、母性の感情が育（はぐ）まれることになる。二人の男子とも 僧侶になったか

○ 歌人 『続古今集』以下 勅撰集に三十七首入集

正和二年（一二三二）に完成した勅撰集『玉葉和歌集』一一四九番、並びに室町時代の永享十一年（一四三九）に完成した『新続古今和歌集』一四五四番に 次の歌が収録されている。

旅

○ かり枕をささが露のおきふしになれて幾夜のありあけの月（玉葉）

（通釈）草を刈って仮の枕とし 小笹の露に濡れての寝起きにも慣れて幾夜経ったことだろう——そうしてもう有明の月が出る頃になった。

○ はかなしやつらきはさらにつらからで思はぬ人をなほ思ふ身は（新統古今）

五、その他

(1) 当時の「後深草院」は「のちの—ふかうさ」院と称されていた

▼ 『和長卿記』明応九年（一五〇〇）十月七日条（※文章博士東坊城（菅原）和長の日記）
後深草院一号者、後字用訓読云々、其様御不孝之読、不聞好之儀也、〔後深草院、〕

「後深草院の—の号は、〔後〕の字、訓読を用いると云々、其の様、御不孝の読みに
聞こえ好まざるの儀なり、〔後深草院、〕」

【解説】

「深草」の当時の読みは「ふかうさ」であった。そのため「後」の字を付けて音読みすると「後深草（ごふかうさ）」となつて「御不孝」に聞こえてしまう。そこでそれを嫌つて「後」の字を訓読みし、「のちの—ふかうさ」院と称したという。

(2) 当時の朝廷は幕府の掌中にあつたと言つてもよい

1 幕府は使者を朝廷に派遣し、六代將軍源惟康について、一ト月前に任ぜられた官を辞す代わりに親王とするよう強要する。

▼ 『勘中記』弘安十年（二二九二）九月二十六日・二十七日条

「廿六日甲寅、晴る、参院す、（中略）（基政朝臣云く、去夕 東使（＝幕府の使者）能登前司（佐々木宗綱上洛すと云々、定めて重事を含む歟、（以下略）」

「廿七日乙卯、（中略）早旦参院す、世間の事等を承らんが為なり。東使の申す事等、春宮大夫（西園寺実兼、去夕 参院し申し入ると云々、（惟康將軍の）幕下（左中将并びに納言中納言を辞し申され、親王の宣旨を蒙らしめ給ふべきと云々、又 造閑院（閑院宮の造宮）の事を申し入ると云々、（以下略）」

2 更に大覚寺統の後宇多天皇に替わつて 持明院統の熙仁親王を踐祚させるよう要求する。

▼ 『勘中記』弘安十年（二二九二）十月十二日条

「早旦参院す、（中略）関東の使者佐々木宗綱、文函を隨身し、只今春宮大夫（＝西園寺実兼）の許に罷り向ふの由、其の聞え有り、即 下向すと云々、是 春宮（＝熙仁親王）受禪の事、計らひ申すの由、其の説有り、少時 大夫（実兼）参入す、先に富小路殿（後深草院の御所）に参る、その後 此の御所（＝角の御所）に参る、数剋御対面有り、関白殿（＝二条師忠）、帥已下の人々参りて評定有り、此の間、予 春宮（熙仁親王のもと）に参り御膳の陪膳を勤む、（親王が言うには）「龍興有るべきの由 関東（＝幕府）計らひ申す」と云々、御所中上下騒動し、人々群参すること雲霞の如し、御膳了りて、予退出す、（後宇多帝の御所に参内し、御膳の役送を勤む、後に聞く、「新院（＝龜山院）より帥の卿を以て御使いと為し、執柄（権限の委譲）を申さると云ふ、重事 御沙汰有るべし、」と云々、

▼『伏見院御記』弘安十年十月廿一日条

「廿一日戊寅、天晴る、今日讓位也、去る十二日、関東(＝幕府より申すに依る也、日時は(賀茂)在秀朝臣、兼ねて之を扱ひ申す、関白(＝二条師忠)之を仰すと云々、亥の刻午後十時頃、清凉殿に渡られ、朝餉等御調度、寅の刻、宗実朝臣 劔を持ち、信冬朝臣 璽の笥を持ち、南の階より昇る、関白 同しく階より昇り、簀子に候ず、内侍二人進み出で劔・璽を取り、(劔は高内侍、璽は少将、今夜内侍に渡す也、)内に入る、(以下略)」

【解説】

幕府が申し入れてから僅か十日弱で後宇多天皇は讓位し、仁親王が踐祚することになった。まさに当時の皇位は幕府の掌中にあつたと言つてよい。

(3) 「武蔵野」を通る古道は 人の背丈よりも高く繁る草々に覆われていた

▼『更級日記』(菅原孝標女 岩波文庫)「たけしば」

「今は武蔵国になりぬ。ことにをかしき所もみえず、浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生ふと聞野も、葦・荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたる末見えぬまで高く生ひ茂りて、中をわけ行くに、たけしばといふ寺あり。」(以下略)

(4) 葵祭(賀茂祭)における飯沼資宗の装いに対する公家側の賞賛

▼『実躬卿記』正応五年(一二九二)四月二三日条

「雨下る、今日、(葵祭也、巳の刻午前十時頃 (後深草院の)御幸と云々、末の刻午後二時頃許、天晴る、見物の為、密々出立し、車を一条高倉先の官人の渡りに遣はす也、右衛門尉 中原章敏・左衛門尉 藤 信重・左衛門尉 中原明治・左衛門尉 平宗達・左衛門尉 中原行宣・左衛門尉 中原章任・飯沼判官助宗等也、(以下臆、信重以上五位の尉を先と為す、)使(檢非違使)の飯沼、常の時は関東(兼府)の重人平左衛門入道(頼綱)の子息也、(葵祭の供奉の為、其の比上落す、其の躰大いに美麗、凡そ言語の及ぶ所に非ざる也、梓持の付物、金鞠・銀鞠を共に銀の打杖に付け、御……(以下の文字不明)其の上に金銀を付く、又直垂の男は、金作の大刀を持つ、馬副有り、馬は黒の栗毛、其の名を葵と号すと云々、」